



Tokyo Gakugei University Repository
東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	益田勝実氏の国文学(fulltext)
Author(s)	河添,房江
Citation	学芸古典文学(6): 1-2
Issue Date	2013-03-01
URL	http://hdl.handle.net/2309/145416
Publisher	東京学芸大学国語科古典文学研究室
Rights	

益田勝実氏の国文学

河添房江

昨年の十一月末に『天変地異と源氏物語』という本の企画で、保立道久氏、三田村雅子氏と鼎談をする機会に恵まれた。その詳しい内容は、この五月に翰林書房から刊行される予定なので譲りたいが、一言でいえば、平安期の地震をふくめた天変地異と平安文学との関係を総覧するといった類のものであった。さらに、その座談会で印象的だったのは、歴史学者の保立道久氏が益田勝実氏に心酔して、本の題名にもなった「火山列島の思想」という論文を座談会の中でもしばしば引用していたことであった。「火山列島の思想」の初出は、岩波の雑誌『文学』の一九六五年五月号で、出雲で大国主とよばれたオオナムチ（大穴持）の神は、『風土記』の世界では外征や国内平定の神であるけれども、その古層においては火山神であることを、大隈の国の海中にあった火山神オオナムチの名から掘り起こしてみせた論文であった。この論文を収めた『火山列島の思想』について、保立氏は昨年出版された岩波新書の『歴史のなかの大地動乱』で言及し、また「益田勝実氏と歴史学の立場」（『リポート笠間』53号、二〇一一・一一）でも、次のように指摘している。

益田さんの神話研究の根本は常世国、少童神、崇り神などと神の再誕の神話、そして「忌み」の思想と「神道」について繰り広げられた『火山列島の思想』（一九六八年）から『秘儀の島』（筑摩書房、一九七六年）にいたる独自の省察の展開にある。それが柳田国男・折口信夫との格闘であったことはいうまでもないが、歴史学の石母田正が主唱した神話論Ⅱ「英雄時代論」への応答であったことは疑いない。そして、現在では、私は、歴史学徒として、益田さんの議論は石母田さんが目ざしたものを越えたということを確認ざるをえないと考えるにいたっている。（中略）つまり、この座談会で、益田さんが「純歴史家の、時代の世相の中の一つ一つの現象を掘り起こしていく仕事」では文学研究の目ざす「想像力・表現力の歴史」を解明することはできないと宣告しているのを見ることができないのである。私には、これは第二次大戦後の歴史学と文学研究の関係が、結局はうまくいかなかったと益田さんがおっしゃっているように読める。歴史学への一種の破産宣告である。

保立氏が書物として『火山列島の思想』に出会い、「地震列島の思想」を岩波新書にまとめながら、益田国文学を検証し、会えなかった益田勝実という存在を思い描いたとすれば、私と益田勝実の出会いはまだ別のものであったといわざるをえない。学部三年、四年と本郷キャンパスで、益田先生の授業を受講した一人であった。テーマは一年目が説話文学、二年目は上代歌謡であったと思う。一時限目で教壇の脇にしか教室の入口がないという遅刻しづらい授業であったが、ファンは多かった。本題に入る前の雑談が抜群におもしろくて、ロッキード事件華やかかりし時であったから、ある時は政治情勢であり、ある時はダンプの運転手がいかに社長お抱えの運転手になっていくか、そ

の出世街道の話であったり、世間知らずの学生たちをその方面でも数々啓蒙してくださった。そんな益田先生の話術に魅せられ手にとった『火山列島の思想』であったが、内容は予想以上に重く、衝撃的でさえあった。いまは見失われた日本の想像力の古層を掘り起こすという視座から、たとえば桐壺更衣の横死が古代天皇制の神器のタブーと関わるのが見事に解き明かされていて、私の源氏物語観は一変した。

若かりし私がいかに益田国文学に魅了されていたか、一つの例を挙げれば、院生の頃まとめた「源氏物語の暁」という論文の冒頭は、『火山列島の思想』の第一章「黎明」の引用から始めている。益田先生のような巧みな話術の授業はできないまでも、せめて学生たちに益田国文学の呪縛をかけたくて、一年生の国文学史の授業では、必ず「日知りの裔の物語」のコピーを配ることにしている。つまり『火山列島の思想』は、私にとって国文学の必読書のベスト3に入るものであるが、その中でも最も忘れがたく、今も時おり思い起こす一節が、「あとがき」の次のような文章である。

真淵・宣長の国学の伝統をもつ国文学研究が、もういちど他の文化諸学とあいわたるものとなりうるには、あくまで最も文学研究らしい文学研究として徹するほかない、と考えている。「いまの国文学」的ではない問題意識を抱き、いろいろな素材・方法によってかぎなく雑駁化しつつも、文学の研究としての純化の道をたどる、ということがありはしないのか。他の諸学が、とにかく、文学を文学として扱おうとするその研究から、影響を蒙るようになったとすれば、それがその時代の新しい国文学というものだろう。わたしはそう考えるのだが、現実にはわたしたちの時代の国文学は、他の文化諸学に対してたえず受け身であり、なにかを受けとらされる側にだけ回ってきた。そうでないものにはない、それがわたしの念願であり、その意味での文学研究に徹したいのだが、その境地にはほど遠いところにある。わたしたちの国文学もまた、学問における日本陸封魚の一種ではないのか。

誤解のないように言い添えれば、「最も文学研究らしい文学研究として徹する」とは、他の文化諸学から単純に距離を置くといった研究のスタイルではない。むしろ「いろいろな素材・方法によってかぎらず雑駁化しつつも、文学の研究としての純化の道をたどる」とは、歴史学や神話学や民俗学をはじめ、幾多の文化諸学に精通した益田勝実ゆえに到達した境地であることを忘れてはならない。「国文学しか知らない、興味が無い」と豪語する輩がいたら、それこそ氏は冷笑を浮かべるだろう。だからこそ、益田氏をして言わしめる「その意味での文学研究に徹したいのだが、その境地にはほど遠いところにある」とは、謙遜というより絶望のつぶやきであり、われわれ国文学徒にとって、あまりにも重すぎる言葉である。

しかし保立氏は、益田国文学は石母田歴史学を超えたといひ、歴史学への一種の破産宣告をしているという。そして何よりも、保立歴史学が『火山列島の思想』をたどり直しながら「地震列島の思想」を書き上げたという意味は大きいのではないか。「他の文化諸学に対してたえず受け身であり、なにかを受けとらされる側にだけ回ってきた」国文学を「そうでないものにした」と念じた益田国文学が、五十年近くの歳月を経て、保立歴史学に力強く発信しえた僥倖を思わずにはいられないのである。